援助要請行動の促進・抑制要因に関する研究 (3) —友人関係と悩みの深刻度の交互作用に着目した検討—

○三宅 拓人・水野 雅之・宮武 智佳
(筑波大学人間総合科学研究科)

キーワード：援助要請行動, 友人関係, 悩みの深刻度

A Study of Facilitative and Obstructive Factors of Help-seeking Behaviors : Focused on Interaction between Friendship and Seriousness of One's Problem

Takuto MIYAKE, Masashi MIZUNO and Tomoka MIYATAKE
(Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba)
Key Words: help-seeking behaviors, friendship, seriousness of one's problem

問題と目的

援助要請に関する先行研究から、援助要請の規定因について様々な要因が明らかにされてきた。水野・石隈 (1999) は援助要請の規定因を「ネットワーク変数」, 「パーソナリティ変数」, 「個人の問題の深刻さ, 症状」, 「デモグラフィック要因」という 4 つの領域に分類している。また, 木村・水野 (2004) や佐藤 (2008) では, 専門機関よりも友人や家族が援助資源として利用されやすいことが示されている。従って, 援助要請の規定因を検討するうえで, 友人や家族といったインフォーマルな援助者に焦点を当てることは重要であると考えられる。そこで本研究では, インフォーマルな援助資源の中でも, 大学生活においてより中心的な人間関係と考えられる友人関係に注目した。

青年の友人関係を検討した岡田 (1996) では「表面的には明るく友人関係をとりながらも他者からの評価や視線に気を遣う」友人関係の一類型が指摘されている。この指摘に基づく, 友人関係の持ち方によっては, 深刻な悩みを打ち明けることは難しいと考えられる。

そこで, 本研究では, 友人への援助要請行動に及ぼす友人関係と悩みの深刻度の影響について, 特にその交互作用に着目して検討することを目的とする。

方法

調査対象者 関東圏 2 校の大学生 266 名 (男性 86 名・女性 180 名) を分析対象とした。平均年齢=18.60 歳 ($SD=0.88$)。

調査時期および調査手続き 2013 年 7 月に無記名の個別記入形式の質問紙を講義時間中に配布し, 回答を求めた。

調査内容 (1) デモグラフィック変数: 学年・年齢・性別 (2) 悩み経験と深刻度: 木村・水野 (2004) を参考に, 「対人・社会面」, 「心理・健康面」, 「修学・進路面」の悩みを設定し, 最近 3 ヶ月間の悩み経験の有無と悩み経験がある場合の深刻度を 5 件法で回答を求めた。

(3) 友人関係: 岡田 (1996) で作成された友人関係尺度を使用した。「表面的・内面的関係」, 「群れ」, 「気遣い」の 3 下位尺から成る。

(4) 援助要請行動: 悩み経験とその深刻度と同様の 3 領域の悩みについて, 最近 3 ヶ月間の援助要請行動の有無を尋ねた。

結果と考察

友人関係尺度の 3 下位尺度を用いてクラスター分析を行い, 調査対象者を次の 3 つのクラスターに分類した。3 つのクラスターはそれぞれ, 3 変数すべてが相対的に低い「消極群」, 「表面的・内面的関係」の得点が相対的に高い「内面開示群」, 「群れ」の得点が相対的に高い「集団重視群」と命名した。なお, 「気遣い」の得点は「内面開示群」と「集団重視群」では同程度で, その 2 群よりも「消極群」は低い得点であった。

クラスター分析の結果を受け, 次の 3 つの仮説を立てた。(1) 悩みの深刻度に関わらず, 内面開示群は援助要請行動を行う。

(2) 悩みの深刻度に関わらず, 消極群は援助要請行動を行わない。(3) 悩みの深刻度が高い時には, 集団重視群は援助要請行動を行わない。仮説を検証するため, 友人関係のクラスターと悩みの深刻度 (中央値で低群と高群の 2 群に分割) を独立変数, 援助要請行動を従属変数とした 2 要因分散分析を行った。その結果, 悩みの深刻度は 1%水準で有意であり ($F(1,254)=18.64, p<.01$), 友人関係の主効果も 1%水準で有意であった ($F(2,254)=18.30, p<.01$)。なお, 交互作用は認められなかった ($F(2,254)=0.64, n.s.$) (Table1)。援助要請行動は, 悩みの深刻度低群よりも高群の方が有意に高かった。また Tukey の HSD 法による多重比較を行ったところ, 援助要請行動は消極群より内面開示群, 集団重視群の方が有意に高く ($p<.05$), 集団重視群よりも内面開示群の方が高い傾向にあった ($p<.10$) (Table1)。

分析の結果, 悩みが深刻であるほど, また内面を開示するような友人関係であるほど, 援助要請行動は行われやすいことが明らかになった。悩みの深刻度と友人関係の持ち方との間に有意な交互作用は認められなかった。したがって, 仮説

(1) と仮説 (2) は支持されたが, 仮説 (3) は支持されなかった。その理由として次のようなことが考えられる。「集団重視群」であっても, 「内面的関係」の得点は, 理論的中間値よりも高い得点であった。このことは, 周囲の友人に気遣うような友人関係を持った一群においても, ある程度は内面を開示するような関係性を築いており, 悩みの深刻度に関わらず友人に相談できる環境にあることを示唆している。

Tab1 クラスター×悩みの深刻度ごとの援助要請行動の平均値および標準偏差と2要因分散分析の結果

全体	内面開示群		消極群		集団重視群		クラスターの 主効果	悩みの深刻度の 主効果	交互作用
	深刻度低群 n=47	深刻度高群 n=29	深刻度低群 n=47	深刻度高群 n=55	深刻度低群 n=40	深刻度高群 n=42			
1.84 (1.63)	2.15 (1.59)	3.10 (1.88)	0.74 (0.99)	1.69 (1.37)	1.70 (1.62)	2.21 (1.62)	18.30 ** 内面開示群, 集団重視群>消極群** 内面開示群>集団重視群†	18.64 ** 深刻度高群>深刻度低群**	0.64 n.s.

() 内は標準偏差

† $p<.10$, ** $p<.01$